

創刊にあたって

日本における実証的宗教心理学は進展している¹

松島 公望 東京大学

The psychology of religion as an empirical science in Japan is definitely moving forward

Kobo MATSUSHIMA (The University of Tokyo)

これまでの日本における実証的宗教心理学— 本誌創刊までの歩み—

「日本における実証的宗教心理学は永く沈滞している」——このような文章を何度書いただろう。実際、私が研究を始めたおよそ四半世紀前も沈滞した状態であった。実証的宗教心理学においては、「共に研究を考え、語り合うコミュニティがない」「自分たちの研究を活かし、研究を協働して行うプロジェクトがない」「学ぶための本がない」「行った研究の受け皿となる学術誌がない」とまさに「ない・ない」だらけの状態であった。

なぜ実証的宗教心理学の領域は「ない・ない」だらけだったのだろうか。主要な要因として「宗教／スピリチュアリティにおける心理学的研究の難しさ」が挙げられる。宗教は、たとえば「信仰は個人のものである」と言われるように非常に個別性が強い傾向にある。しかし、心理学的研究は一般化・普遍化・平均化へと向かう方向性を有しているため、個別性の強い「宗教／スピリチュアリティ」と「心理学的研究」とは非常に相性が悪かった。

「宗教／スピリチュアリティ」と「心理学的研究」は研究として成立しにくい関係にあったが、そのような困難な状況でも研究はいくつか存在していた(杉山・松島, 2011)。しかし、これらの知見はほとんど知られることがなかった。その主な理由として、これまでの研究は大学紀要や宗教団体の機関誌に掲載されていることが多く、また、研究者間での議論や交流がほとんど行われてこなかったことが挙げられる(松島, 2012)。そのため、これらの知見は継承されないまま埋もれていくという悪循環を繰り返してきた。

日本における実証的宗教心理学は、1900年に

元良勇次郎らによる「日本現時學生の宗教心に関する調査の報告」(元良他, 1900)から始まったのだが、それから100年、特に戦後以降から20世紀の終わりまでこの悪循環は続いた。この悪循環を断ち切る大きな転換点になったのが、「宗教心理学研究会」の設立であろう。宗教心理学研究会は、実証的宗教心理学の研究を行っていた数人のメンバーによって2003年に設立された。ただし、設立当初から実証的宗教心理学のみを対象としてはおらず、宗教学などの人文科学分野のメンバーも関わっており、広く宗教心理学を考え、議論する場として機能していた。そのような状況は非常に意味があり、宗教研究や宗教の現場に関わる様々なメンバーによって、実証的宗教心理学についてもじっくり議論する場が宗教心理学研究会を通して作ることができたのである。

その結果、さらに新たな波が生じることになった。その新たな波の一つとして、実証的宗教心理学をベースとする研究プロジェクトが生み出されていったのである。宗教心理学研究会が設立された2年後の2005年には、「宗教心理学の体系化に関する研究—宗教心理学の社会的貢献にむけて—(基盤研究(C)企画調査／研究代表者：西脇 良)」と題した科研費研究プロジェクトが始動した。さらに2012年には、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連—苦難への対処に関する実証的研究—(基盤研究(B)／研究代表者：松島公望)」も行われ、実証的宗教心理学の研究領域が大きく展開していったのである。

もう一つの波は、実証的宗教心理学に関する書籍の刊行であった。この分野の概論書は1946年に刊行された今田恵の『宗教心理学』(文川堂書房)を最後に刊行されず、それからおよそ60

¹ Corresponding author: Kobo MATSUSHIMA (E-mail: ckobo[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

年ぶりに『宗教心理学概論』(金児,2011), さらにその5年後には, 2012年度科研費研究プロジェクトをベースにした『宗教を心理学する』(松島他,2016)が刊行された。『宗教心理学概論』では, 実証的宗教心理学のこれまでの歩みを体系的に学ぶことができ、『宗教を心理学する』では, 宗教をテーマにしていかに心理学的に研究を行うことができるのかを具体的に学ぶことができる。書籍の刊行により, 実証的宗教心理学を学びたいと考える人に向けて, この分野の知見を提供することができるようになったのである。

日本における実証的宗教心理学のこれから— 本誌創刊からの展望—

宗教心理学研究会が設立されておよそ20年が経とうとしているが, このタイミングでもう一つの新たな波が生まれようとしている。それが今回の『宗教／スピリチュアリティ心理学研究』の創刊である。「宗教／スピリチュアリティ」としたのは, 近年, 国内外において宗教が幅広く捉えられるようになり, この二語が並列的に用いられることが多いためである(APAの発行する学術誌も“*Psychology of Religion and Spirituality*”となっている)。

これまで実証的宗教心理学においては, 新たな研究が生み出されてもそれぞれバラバラな形で発表され, 研究が「散見しやすい」問題を常にはらんでいた。しかし, 本誌が創刊されたことにより, そのような問題は回避できる。本誌を通して, 宗教／スピリチュアリティについての研究成果の発表・蓄積と研究者の相互交流の活性化が期待される。

さらに本誌の役割はそれだけにとどまらない。2022年に開催された日本心理学会第86回大会公募シンポジウム「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中)—実証的宗教心理学の挑戦—」の話題提供の中で, 本誌副編集委員長である白岩祐子氏が本誌の持つ意義として, 「研究成果の公開と発信」「学術誌

としての質の維持」「独創性の芽を守る努力」「論文アクセス可能性の向上」「研究促進・次世代の育成」を挙げた。本誌はこれらのことも念頭に置きながら運営していきたい。さらに白岩氏は「日本国内創刊でノウハウを蓄積した上でアジアに広く展開してはどうか」と提案したが, 本誌はそのことも意識して創刊した。表紙の雑誌名を日本語, 英語と併記し, 英語論文の書誌情報を英語で記載しているのは, この先広くアジア圏に向けた学術誌となるように育てていきたいと考えているからである。本誌を通して, アジア圏の宗教／スピリチュアリティについての研究成果の発表・蓄積と研究者の相互交流の活性化へとつながっていくことができればと思い描いている。この創刊号がその「はじめの一步」である。

本誌創刊を起点としてこれからの実証的宗教心理学を展望する時に, これまでは「日本における実証的宗教心理学は永く沈滞している」と記していたが, 今日から「日本における実証的宗教心理学は進展している」と記すことにしたい。

引用文献

- 金児曉嗣(監修) 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良(編) (2011). 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版
- 松島公望 (2012). 日本における実証的宗教心理学的研究の過去・現在・未来 心理学ワールド, 59, 9-12.
- 松島公望・川島大輔・西脇良(編) (2016). 宗教を心理学する 誠信書房
- 元良勇次郎・岩永五郎一・石幡伊三・石田悟雄・春山作樹・速水滉・大西正太郎・岡本幸實・小田切良太郎・吉田熊次・中尾教厳・中尾融・深作安次郎・新井宗太郎・秋田實・佐々木政直・紀平正美・菊地俊諦 (1900). 日本現時學生の宗教心に關する調査の報告 哲学雑誌, 15,1-38(付録).
- 杉山幸子・松島公望 (2011). 宗教心理学の歴史 金児曉嗣(監修) 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良(編) 宗教心理学概論 (pp.27-55) ナカニシヤ出版